

古さと不便さを一掃した スタッフの熱意と コーディネーターの「通訳」

北海道中央労災病院せき損センター西1階病棟 / 北海道美唄市

設計 一級建築士事務所「自然」^{じねん}



JR 美唄駅から徒歩数分で、広々とした病院敷地内に到着する。

札幌の東南約 50km、石狩平野に位置する美唄市は、日本最大のマガン飛来地としてラムサール条約にも登録された宮島沼を擁する、北海道有数の米どころです。

北海道中央労災病院せき損センターは、かつて炭鉱町として栄えたこの地でしばしば起こった落盤事故の負傷者に対する医療を主な目的に、昭和 30 年に美唄労災病院の名で創設されました。平成 19 年にせき損センターとして再出発、北海道随一の脊椎損傷（せき損）の高度医療機関として全道から患者さんを受け入れています。

せき損医療には一般的な医療と比べて多くの違いがあります。患者さんの大多数は四肢の麻痺に代表される重度の障害を負い、入院期間も平均半年以上と長く、在院中は急性期から回復期リハビリテーションを経て社会復帰まで一貫したケアが必要なのです。以前は、立てなくても上半身が使える、比較的自由度が高い青年層が多かったのですが、昨今は高齢者の四肢不全麻痺や全体的な機能低下に伴って介護度が上がっているため、設備形態の変更も追られています。

平成 20 年、この特殊性をふまえた西 1 階病棟の改修が完了しました。全スタッフがその力を結集してつくりあげた、患者さんへのやさしさと思いにあふれた空間です。

病院を取り巻くすべての人が主体的に関わった

改修構想は平成 19 年、新たに病院長に就任した安田慶秀さんのリーダーシップの下で本格的に動き出しました。もっとも特徴的だったのは、一連の過程に対する全スタッ

フの恒常的・積極的な関わりの姿勢です。

「関係者全員が患者さんの急性期から回復期、リハビリテーション期、在宅復帰という過程を考え、それに沿うような改修をしたい、というのが基本コンセプト。そのためのプロセスとしてそれぞれの立場からみんなが意見を出し合いました」と安田院長は振り返ります。

この手法、一見当然のようですが実現できたのはかなり珍しいといえるでしょう。治療全体を見る医師はもちろん、患者さんの身体状況や気持ちをよく知る看護師、せき損医療の重要な部分であるリハビリテーションを担当する理学療法士、作業療法士、さらに医療者に限らず改修工事の施工従事者や院内に出入りする清掃会社のスタッフまでを巻き込み、病院空間を構成するあらゆる分野の「プロ」たちがそれぞれの職能を発揮しつつ協力して改修計画を進めたのです。決して簡単ではないこのやり方の先頭に立ってスタッフを引っばったのは整形外科・リハビリテーション科部長の医師楫野知道さんでした。「患者さんのことは看護師、リハビリや施設の使い方はセラピストが、医師よりもよくわかっています。そんな現場の声を吸い上げ、場合によっては清掃の方々にも使い勝手を聞くなど、使う人たちの声を最大限に容れて整理し、アフター 5 のカンファレンス、さらに事務方が担当するオフィシャルな会議へと落とし込みました」

これに応え、当時の病院内は廊下でスタッフ同士行き会うたびに「あれどうなった？」と、改修のための話し合いやアイデアの提案があちこちで繰り返されたといいます。実質 2 ヶ月という短期間で集中的に行なわれた膨大な「意見のキャッチボール」が現在の使いやすさにつながっているのでは、とは楫野さんの言葉です。

「コーディネーター」の大きな貢献

今回の改修にはもうひとり、立役者が存在します。高齢者や障害者向けの住宅改修を主に手がける一級建築士事務所「自然（じねん）」の主宰者であり、介護支援専門員の資格も持つ東道尾^{ひがしみちお}さんがコーディネーターとして加わったことで、現場の声がスポイルされることなく実際の建築・設備に昇華したというのです。

「セラピストと看護師の言葉、まして建築家の言葉はそ



広くて明るい一番人気のブース。前方ボード付手すりが好評。



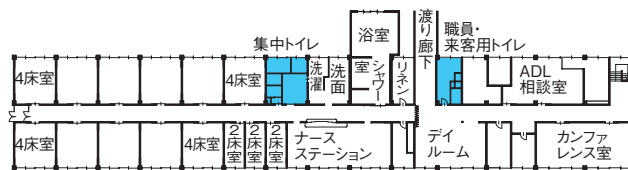
床・壁がタイル張りから表面塗装となり、温かみのある表情になった。



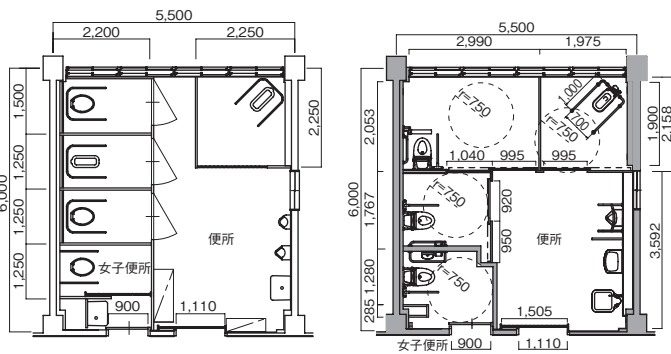
両脇から介護できるトイレも内装が変わり、便器や補助具も新しくなり、ソフト便座や、2段式手すりなどもついて快適に。(上の写真は改装前)



改修を機に、完全に分離された女子トイレ。赤い手すりと小ぶりの便器がかわいらしい。



病棟平面図。ナースステーション、デイルームの廊下側の壁が取り払われ、開放的で明るくなった。



改修前のトイレ平面詳細図。

改修後のトイレ平面詳細図。

それぞれ違い、いくら話しても互いに理解するのは難しい。建築と介護がわかる東さんが間に入って翻訳・コーディネートすることでコミュニケーションがよくなり、やりとりができるようになりました」と楳野さん。

設計者というよりアドバイザー・交通整理役として企画を依頼された東さんは自身のふたつの専門性を生かし、医師・看護師・セラピストはもちろん、施工にかかわるスタッフらとも濃密な協力関係を築き上げていきます。医療スタッフとの関係づくりは「これはどういう意味かとか、具体的にどんな人が使うかといったこちらの質問をまずぶつけて、相手がそれに答える、そんなやりとりの中でベースができました」。

施工従事者にも同様です。

「図面通りにはつくれる人たちですから、こんな患者さんが入るから入口を広くしたいとか、こういう状況の人向けの手すりだからね、と説明したんです。施工屋さんからも細かい技術的な点に関する提案が出てきたり」

そこに建築士かつケアマネジャーとしての自らの知識や経験に基づく提案も加えつつ、東さんは医療から建築の現場まで見事な橋渡しをし、つないでいきました。計画当初に図面作成を依頼した会社には病院の要望がうまく伝わらず、出てきた図面は使い物にならなかったとのこと。そんな中に迎えられた東さんは、その明るいキャラクターも相まって、まさに「いちばん大きかった存在(楳野さん)」となったのは想像に難くありません。

それぞれの現場で、プロがプロの仕事をした

実際の改修は「既存のスペースをできる限り生かすローコスト工事」という大きな制約がありましたが、これを乗り切らせたのも最終的には関係者間のよいコミュニケーション、チームワークといえそうです。

トイレは東西に延びる病棟の中央、ナースステーションの向かいに配置されています。改修前は男女の区画もなく、寒色系の古いタイル張りの床と壁は、はがれた箇所が別色のタイルで補修されているような状態でした。

当初、床と壁は予算上の判断で部分張り替えになりましたが、最終的に内装用の表面処理と塗装とで見違えるように明るくなりました。実はこのアイデアは施工スタッフから出たもの。これ以上のツギハギは許せない、そんなプロの心意気が工事範囲外の仕事をさせたといえます。窓枠のキャメル色は温かみのあるテーマカラーで、廊下やデイルームにも採用されました。

限られたスペースながらレイアウトも変更されています。隔壁が天井まで届かず、ブース上部では男子トイレとつながっていた女子トイレはの一番に区画されました。入口奥にアコーディオンカーテンという不便な状態もやめ、さらに高齢女性の体格に配慮して家庭用の小さな便器を置くという、患者さんへの思いやりと尊重が感じられる計らいです。

共用トイレ内は男性用小便器と大便器をひとつずつ減らし、開き戸とアコーディオンだった扉をすべて引き戸に変えました。便器の数は常に問題となりますが、東さ



方立てのない大きなカウンターでオープンな雰囲気となったナースステーション。全体的にクリーム色を基調とした濃淡の色調でまとめられ、柔らかな雰囲気を醸し出している。



病院いち明るくて快適になったデイルームは、他病棟の患者さんからも人気。ここも廊下側の壁が取り払われ、面積も以前より広げられた。



私たちは患者さんのニーズを現場の視点で話し合い、減らすことで合意。結果、各ブースが広がって側方介助がしやすくなり、車いすの回転も楽になりました。また、どちらの片麻痺でも安心して使えるよう、左右それぞれに対応したトイレになりました。ウォシュレット操作部もワイヤレスパネルで扱いやすくなりました。また、右奥に設置されている柔らかな便座のバリアフリー便器は「急性期から退院を考える時期まで一貫した治療を行なうため、トイレにもバリエーションが必要（楫野さん）」との病院の要望にこたえて残されたものです。

さらに、便器を減らしたことでスペース全体に余裕ができ、左の奥には2m×3mと広く、窓からの採光も明るいブースができました。患者さんにも好評で、このブースに入るために待ちの行列ができるとのこと。長い入院生活の中では、トイレのこんなアメニティも重要になってくるのではないのでしょうか。

便器のほか手すり類もすべて新品に交換されました。

「ステンレスの手すりは冷たくて触りたくなくて。そうしたら東さんがカラーコーティングしたのを提案してくださって……高齢の方にも見やすいでしょ。かわいいし、明るくなってほんとうによかった」と、せき損センター作業療法士・入部雅江さんが誇らしげに示す手すりは、大便器・男性用小便器ともにトイレ全体の雰囲気を明るく引き立たせるビビッドな赤い色。血を連想させると一時期の病院では好まれなかった色が、このトイレでは大きな魅力となっています。

位置や幅、高さの問題が多く使い勝手が悪かった従来の水平手すりはL型と跳ね上げ式とに変更され、「トイレの自立がしやすくなりました。今まで手すりの位置が悪くて、車いすからの移乗や横移動のスペースがなかった。これなら今までできなかった人も大丈夫」と日々リハビリ指導に励む入部さんは目を細めます。

また、広いブースにつけられた前方ボード付手すりは「体幹バランスの悪い人にも、障害があって排泄時間が長い人にもすごくいいもので、必ずつけたかったです」と言う、介護福祉に造詣の深い東さんならではのこだわり。

この手すりの色に合わせてL型・跳ね上げ手すりもここは木目調にするほどの「イチオシ」補助具です。

廊下やスタッフコーナー、デイルームも改修と同時に整備されました。トイレと同じくキャメル色をポイントに色彩を塗り替え、ナースステーションは広いカウンターを設けてオープンな雰囲気に。明るい色の壁紙に張り替えたデイルームは、他の病棟の患者さんまでが足しげく訪れてくつろぐ、院内の人気エリアになりました。

改修がもたらしたチームワークと良き変化

「ナースは患者さんの24時間の生活を支える者として、介助しやすさや患者さんの使いやすさを日常的に見聞きし、感じています。そこからの意見を反映してきれいに改修してもらって、気持ちよく仕事ができます」とは、せき損センター看護師長の町中潤子さんの言葉です。病院を取り巻く人々がそれぞれの立場・職能を足がかりに意見を出し合い、主体的に関わった改修は、建物や設備以外にも多くのものを残しました。院長の安田さんは「ひとつのプロジェクトに対し、みんなが日常業務から離れて、ああでもないこうでもないと言いながらつくり上げていく。病院のチームづくりということでアクティビティの大きな財産であると評価しています」と語ります。

スタッフの働き方にも変化が表れました。「ナースステーションをオープンカウンターにしたことで、私たちは患者さんに見られ、かつ患者さんをよく見られる、そこですごく意識が変わりました」と町中さん。楫野さんも続けます。「臭気も含めてトイレが格段に良くなると患者サービスがだいぶ違ってくる。そこがしっかりとすると、ゴミについてもみんなが気をつけるようになったり、いい波及効果があって。トイレは重要だと思いました」

限られた既存空間と予算の中で規模も決して大きくはないけれど、多くの人の思いが詰まった、なんとも温かな病棟改修の顛末。安田院長の一言が印象に残ります。「古くて不自由な病院がきれいになるとみんな張り切った。原点はそこだと思う。レベルの高い、自分たちの病院に強い思い入れを持つ、良いスタッフなんですよ」